



種から、どうして芽が出て成長するの

種の中には芽が用意されている

種は、植物にとって、自分の子孫を残すための、大切なものです。大きくて中が見やすい、カキの種などを割ってみると、小さい葉やくきのようなものが、用意されているのがわかります。インゲンの豆の中にも、同じように、根や葉が用意されています。また、種には、植物が芽を出し、葉が出て、自分で栄養分を作ることができるようになるまでの栄養分も用意されています。

植物は、葉の葉緑素が、太陽の光の助けで、根から吸い上げた水と二酸化炭素を材料にして、でんぷんなどの栄養分を作り出し(これを光合成という)、成長していきます。種には、光合成ができるようになるまでの、栄養分が入っているわけです。ですから、ピーナツ、クルミ、マツ、ヒマワリの種など、種は、栄養分が豊富だというわけです。

葉になるもとは、種のと時から用意されている

種は、風で飛ばされたり、鳥やサルなどが実を食べて、ふんといっしょに種をばらまいたりして、遠くへ運ばれます。運よく、土と水と日光にめぐまれた場所へ運ばれた種が、芽を出すことができます。じょうぶな殻や皮に包まれた種は、芽を出せる条件がそろうまで、何年も土の下などで生きていることがあります。芽を出したふた葉は、種のと時から、用意されていたものです。(監修・矢野 亮)

